

自蹊庵便り

平成二十九年弥生

NO 124

「茶事とは？」

全てを生かしきることかも」

え、そういった答えはいくらでも本に書いてあります。

料理の命、素材の色、香り、音、料理での音は歯触りも含みます。茶室の気配と共に生まれる音、道具など物と色、日差しと

この頃、ときおりお人に問われることがあります。茶事とは何ですか…と。茶事と書いてあるのですからお茶のことを云うのですよね…と。私がかつて十年ほど前か、

私が長年茶事一筋におろおろうろしてきた経験から、一言で茶事とは何かを述べるとしたら、どんな言葉を使うのだろうか。あつ、やはり白露かもしれない…。ぽ

に変わりゆく音の移ろい、それは時の移ろいです。時は刻々と色を変え、香りを換え、音を変え、食べ物は味が変わっていきます。そう食材は作った瞬間から味は落ちていくのです。

もつと前であろうか、恩師にお茶ついで云つたらなんでしょうか…と。無謀にもお尋ねしたことを想い出し、何となく懐かしさを感じ、そのとき先生は一言で云うなれば「白露」と仰せになられ、その穏やかなお顔と共に忘れられない人生の一齣です。

…と、そんな気がほんの瞬間ですが浮かびました。でも頭をよぎりはしたものの、それを目の前の若者に話すには乱暴過ぎるようにも思え、あるがままの全てを生かす、それが茶事かも、だから茶事はこの上なく贅沢な時の紡ぎあい、丁寧な反物が織り上がっていくように、横糸と縦糸の強弱、引き具合一つで光沢、肌触りなど仕上がりが違ってきます。そのように時を細く作業の

障子から差し込む日差しのも明るさで道具の色も移ろいます。そう、全てが、一切が、今の今の心の働きと共に一瞬一瞬を掬いとる作業、今日の湿度温度で料理の味付も違えば炭のつぎ具合も違います。

今、茶事とは何ですか…と屈託無く尋ねるこの若者に何から咄し、どう答えようかしら…と自らに改めて問いかけてみる。禅院の食礼が茶道の懷石作法に発展し、今日に至っている茶禅一味の咄を、簡単に解りやすく説明すれば良いのだろうか、いえい

ました。

張って、刻々と移りゆく時の中にあつて、

無心に働き続ける、朝といわず、夜といわず働き続けていると、いつの頃からか、物を生かし、色を生かし、香りを生かし、お人を生かし…と心働きしている内に、気が付いてみれば、おのず自から私自身が生かされていることに気付かされております。

只々、働き続けると思っていた事が、こよなく贅沢な中で生かされているという実感にはたつと気づかされ、俎板の上にも涙を落とすことありて、誠に誠に有り合わせ、間に合わせの延長の人生なれど、身に余ることにございます。

何かの本の中に、間に合わせということは今を生かすこと、機会を生かすこと、チャンスは瞬時に去るので、去っては間が抜ける、これを間抜けという…とあり、思わず声を立てて笑った記憶があります。

間の抜けぬよう物と時を生かす一石二鳥の働きの積み重ね…と書かれていた一文、まさに茶事のために書かれたような一文です。たぶん魯山人の料理本に書かれていた

ように思います。この積み重ねの修練、一

言でいうなれば行というもののなのでしょう。さすれば茶事は修行なのでしょうか。確かに自己修練の場としては、過不足なき凝縮した世界にございますが、私は常々、自分の愚かさの重さの分だけ、お人の優しさに支えられて生かされ続けてきておりますので、茶事は限りなく優しい、日本人に合ったお持て成しの文化だと思っています。

火山国、地震国に生き、自然と共に優しく共同体で、手入れをしながら生きてきた民族、茶事は特権階級から出発している贅沢な遊びのように思われているむきもありますが、自然を尊ぶ敬意を身につけてきた民族ならばこそ、礼儀や作法の完成度の高い優しさを秘めた文化を受けついできているように思います。

日本文化の一つ、いえ、日本文化全体の要素をも内包した茶事というもの、この心優しく、みなみな平等であること、即ち、白露を目標とした、厳しくも優しい心映え

に満ちた茶事模様でありたいですね。

身の丈にあつた有り合わせ、間に合わせの茶事を楽しんで頂きたいと願っております。そうすることによって自ら生まれる不都合と向き合い向き合い重ねている内に、心の働きを練り上げていく一会一会の作業、是非、是非、楽しんでくださいね。

茶事とはほんに生きもの、なま生もの、貧しさゆえに工夫と知恵を賜り、今ここに至り、加速増すばかりの老いと正面から向き合い、ここにまた七十歳過ぎたればこそ、極上の工夫と知恵を賜る日々、なんと日々贅沢な中に生かされていることにございましょう。今年も皆様と共に良き恥をかきあいましょうね。


平成二十九年 立春大吉
巻頭言 茶事屋の繰り言

有り合わせ間に合わせては恥じ一つ

二つに今日も生かされて

読んで得するおまけの頁

一月二月は多忙につき、このコーナーはお休みさせて頂きましたので、天地和合の卦一月から二月を遅ればせ乍ら書き添えておきます。これで一年一巡したかと存じます。

一月の卦は  「地天泰」と云います。これは十二月から陽が一つ増えたことで、陰と陽が半々になり、まさに天地和合の卦であります。天の気と地の気の絶妙なバランスの月であるということです。


一月を睦月というのも親しく睦み合う、即ち和合ですよね。この地天泰の卦は天地の相睦み合う気にて、極寒の冬の大地から芽吹く力を授ける力もっています。

まさに、天と地が結婚して遍く芽吹きを力を持つ、和合とは、すべての力の源ですよ。

一月、新しい年がこの壮大な恵みからスタートするのも、人類を祝福してくれてい

るかのよう…。ことに大和国の豊かさにあつては有難く、そのように思ってしまった。

一月は寅の月でもあります。寅の性質は新しく動き始めることを意味しているそうですよ。森羅万象命あるものすべてが伸びやかに生長し始めるしるしでもあります。まことに一月は新しい命の芽吹きを感じさせる祝福に満ちた月だと思えます。

二月の卦は  雷天大壮 これは天の上に雷がある状態だそうです。天上に雷がとどろき渡ります。一月より陽が力を増してきますので、一月に芽吹くものみな勢いを増す月であります。雷天大壮の大壮とは強壯と同じような意味と云えそうです。

朝晩一分ずつ昼の時間が長くなり、陽の気が日に日に増します。春分、春を分ける、旧暦の二月の方がしっくりいたしますが、それでも昼の時間の伸びたことを感じる今日この頃です。

そして、寅卯辰は五行説では木火土金水

の木にあたりますので、まさに植物の月です。ね、木の月の真ん中にある卯の月は旧暦では田植えの時期です。五穀豊穰を神様に祈る祈年祭が（としごいまつり）か各地方で行われてきたようです。

陰陽五行説を十二月の卦に合わせ、伝統文化大事典を参考に書かせて頂きました。

次回よりまた庭の草々の葉膳シリーズを再開させたいと思います。お楽しみに！